

スポーツと循環器疾患 : Sports Cardiology のすゝめ

企画：島田和典

(順天堂大学医学部 循環器内科学講座
先任准教授)



HEART's Selection

スポーツの語源は、ラテン語の“deportare”であり、19～20世紀に“sport”として世界的に一般化したとされる。“deportare”は、「運び去る、運搬する」の意味から転じて、精神的な次元の移動や転換、やがて「義務からの気分転換、元気の回復」、仕事や家事の「日々の生活から離れる」気晴らしや遊び、楽しみ、休養といった要素を表している。近代スポーツは、1896年のクーベルタンによる近代オリンピックの復活後から発展を遂げた。2013年9月7日、ブエノスアイレスで開催された第125次国際オリンピック委員会総会にて、2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会の開催都市が東京に決定した。

大戦後の社会環境は大きく様変わりし、生活習慣病の激増、疾病構造は大きく変化した。その大きな要因の一つとして、運動習慣や身体活動の低下が挙げられる。一方、平成29年度の総務省統計によると、過去5年間でスポーツを行った10歳以上の人は増加傾向であり、実際に、東京マラソンをはじめ、市民マラソン大会が各地で盛んに行われ、多くの市民ランナーが参加している。

今回の特集では、スポーツと循環器疾患における最新の知見をエキスパートの先生にご執筆頂いた。海外では、スポーツ中の突然死に関する多くの研究が報告され、循環器領域における画像診断技術の進歩に伴いスポーツ心臓の病態解明が着実に進み、スポーツ選手特有の心電図変化について人種毎の特徴も踏まえた研究が行われている。スポーツ参加のためのメディカルチェックは、日本人独自のエビデンスに基づいた評価が、そしてシニアアスリートに対する基準策定も必要である。

スポーツは、部活動や競技会の印象から、激しい運動や勝敗を競うことと捉えられることが多い。しかし、スポーツの本質である“人生を健康的で生き生きと楽しむ”ために、より広義の“身体活動”として理解することが必要であろう。その実践のためにも、2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーとしても、Sports Cardiology についての理解を深め、日常臨床に役立てていくことが求められる。本特集が、読者の皆様の一助になれば幸いである。